

研究所年報 巻頭の言葉

平成16年から全ての国立大学が独立行政法人に移行することになり、これまでの附置研究所の見直し、新たな附置研として省令設置をすべく文部科学省の学術機関課が動き出したのは一年ほど前であろうか。科学技術・学術審議会 学術分科会に国立大学附置研究所等特別委員会が設けられ、附置研のありかたが論議され、平成15年1月15日に「新たな国立大学法人制度における附置研究所及び研究施設の在り方について」の中間報告がなされた。これに先立ち、文科省からわが大学側には平成14年12月17日の段階で、今回の附置研の見直しにあたり、和漢薬研究所を省令設置からはずし法人化後に、その法人の裁量により、自由に改廃する施設にしてはとの話がきていた。和漢薬研および他の定員30名以下の研究所を襲った激震は、中間報告(案)に記載されていた以下の組織性に関する文言である。「研究機関として、継続的に機能を発揮するに十分な一定の人的規模を有することが必要である。附置研究所が全国的な機能を有しつつ、研究者個人の成果を有機的に結合し、最大限の効果を発揮して、新たな分野領域の開拓を目指すとともに、学部及び研究科と同様に学内においても基本的な組織として位置付けられ、大学の運営にも参画するなど諸般の要因を考えれば、当然、学部及び研究科に準ずる程度の教官規模が求められることになる。必要規模としては学問分野やその研究所の目的・使命により異なるものの、学部や研究科の規模や、基本組織としての位置付け等を考慮すれば、30人程度がその目安となろう。」我々の研究所の定員は19名で、東京大学の生産技術研究所(172名)などに比べれば見劣りすることは明らかである。

1月9日臨時附置研究所長等の会議が学士会館本館でおこなわれ、中間報告案の説明がなされたが、学術機関課長は1月29日に7研究所程度の所長ヒアリングを行い、施設に降格する場合もあり、一方、その後大規模の定員を持つセンターのヒアリングを行い、新たな研究所への昇格もあることを述べている。この会議の終わった後、本学の研究協力課長と文科省の学術機関課を訪れたが、私たちの和漢薬研は29日のヒアリングに出てもらう、施設への降格は避けられないであろうことが宣告された。翌日、本学総務部長、主計課長、研究協力課長が文科省の学術機関課研究調整官と話し合った事柄は更に詳細なものであったが、研究所の行く末に関する文科省の意向は厳しいものであった。

1月13日は成人の日で祝日であったが、昨日私が研究所危うしの情報を高久晃学長に伝えてあったので、学長は竹口、寺澤両副学長を招集して和漢薬研の問題が話し合われた。この折り、なんとしても和漢薬研の存続をはかること、そのためには将来30人体制に持っていくことが必要との考えで一致した。その後、和漢薬研の教授、薬効解析センター長、研究協力課長が数日をかけて作り上げた『和漢薬研究所の現状と改革構想(案)』は評議会で了承され、これをもって和漢薬研の所長ヒアリングに臨んだ。この改革案では学内の医学部、薬学部の協力、さらには富山県下の3大学統合後の定員移動を含め30名体制に持っていくこと、これまでの小部門制を

大部門制に変え、全国共同利用型機関を目指し、人事の移動を活発化することなどが述べられ、研究所名も和漢医薬学総合研究所にするとしている。幸いなことに、和漢薬研はその研究のユニーク性、国際的活動が評価され、19人の定員は拠点形成基盤としては弱いが将来的に改革を行い、拡充の方向を打ち出している。附置研として引き続き存続できる方向にあるという。今回の附置研の在り方の論議で、和漢薬研究は裾野がせまく、ユニーク性の衣をまとい安住していたことも無きにしもあらずで、この点は率直に反省し、国内の研究ネットワークを立ち上げ、研究所を中心とした共同研究の推進、和漢薬研究の研究者層の拡大が図られるべきである。今回の和漢薬研究所の問題に関して、中沖豊富山県知事を初めとする、県下の政界、財界の方々からも強い支援をいただいたことに心から感謝したいと思う。また、和漢薬研存続に関して日本東洋医学会、日本生薬学会、和漢医薬学会の会長、さらには中国、インド、ネパール、エジプトの和漢薬研在籍者から説得力ある、また心温まる要望書を多数いただいたことに対して巻頭の言葉を借りてお礼を述べたい。

今回の附置研の評価に関し委員会主査の増本 健博士（元東北大学金属材料研究所長、現電気磁気材料研究所長）は「分科会のメンバーを見てもわかるように、附置研の研究内容をピアレビューするものではなく、附置研としての制度設計がなされているかを吟味するものである。」と述べている。しかし、法人化後には、5～6年ごとに厳しい業績評価が待っているであろう。和漢薬研究所の組織基盤を充実し、研究業績や外部資金の導入を飛躍的にたかめる方策を講じない限り、全国で最も小さい単位の研究所はいつも台風に見舞われるであろう。今後の真摯な研究所改革が必要とされる所以である。

2003年2月

和漢薬研究所長 服部 征雄